

第 3 回

第 7 次総合計画

かつの未来会議意見集

若者アンケート・人口ビジョン（案）に対する意見

令和 7 年 6 月

【第3回会議の実施内容と意見について】

第2回の会議では、「第7次鹿角市総合計画」の基本構想に関して、戦略ごとに、委員の皆さまが感じている課題やその対策の方向性について活発な意見交換が行われました。

市が目指す将来像に向け、現状の課題認識を共有しながら、それぞれの戦略が果たす役割や今後の取組の在り方について議論が深められました。

第3回の会議では、市内在住の若者を対象とした「若者アンケート」の結果や、今後の人口推移の見通しを示す「人口ビジョン（案）」を踏まえ、市民と市の間で認識を共有するためのディスカッションを実施しました。

若者の意識や将来に対する不安・期待、市が果たすべき役割などについて、多角的な視点から意見が出されました。

各グループにおける主な意見や提案については、次のとおり整理しています。

若者アンケートの結果に対する意見

- 「鹿角市に住みたいか」との設問で、「分からない」と回答した若者が約 3 割に上っており、将来を担う若者の地元への定着意識に不安を感じた。鹿角を良くしたいという積極的な想いが広がっていない可能性もある。
- 子どもたちに鹿角市の魅力を尋ねると「自然環境の良さ」が毎回挙がる一方で、それ以外の魅力はあまり認識されていない。部活動や文化活動を通じた経験があるにもかかわらず、そこに十分な魅力を見出せていない実態がうかがえる。
- 「鹿角市に不足しているもの」として挙げられたのは、買い物・交通の利便性やまちの賑わい、医療・福祉の充実など、日常生活に密接に関わる事項であった。市民生活の安定が地域活動やスポーツ、文化面の活性化にもつながると考えられる。
- 「市に意見を伝えたい」と思う若者の割合は 2 割にとどまり、発信の仕方が分からないことが一因と考えられる。これは若年層の政治参加意識の低さ、特に選挙投票率の低迷にも関連しているのではないか。
- 「学校や職場以外の人との交流がある」と答えた 20 代の割合は 42.2%と低く、卒業後の地域とのつながりや居場所の不足が、若者の孤立や地域離れを招いている可能性がある。
- 「鹿角市に住みたいか」という設問に対し、「分からない」と回答した若者が一定数存在する。この層は、自分の将来や地域の将来像を明確に描けていない可能性があり、適切な情報提供や選択肢の提示を通じて、意識の醸成を図る必要がある。
- 「花輪ばやし」は多世代にわたり高い誇りと愛着を集めている地域資源である。この文化を活かし、関連産業や新たな仕事を創出することで、「文化で稼ぐ」地域モデルの構築が期待される。
- 市民アンケートでは「医療の充実」を求める声が継続的に寄せられており、特に女性からの意見が顕著である。安心して暮らせる地域づくりの基盤として、医療体制の強化は不可欠である。
- 「魅力」と「不足」の両面で評価が高い子育て・教育分野については、何が評価され、何が課題と認識されているのかを精緻に分析し、施策に反映することが求められる。
- 若者は近隣の大手企業（例：ニプロ、小坂製錬）への就職に魅力を感じている傾向がある。地元企業の魅力発信や働きがいのある職場づくり、企業誘致などを通じた就労環境の充実が必要である。

- 若者が意見を伝える手段として、インスタグラムなどの SNS は有効である。親しみやすい情報発信ツールを活用することで、双方向のコミュニケーションを促進することが期待される。
- 鹿角花輪駅を降りてすぐ、目の前に葬祭センターがあるまちに違和感がある。若者施策を推進するにあたり、駅前や中心市街地に若者向けの施設や交流拠点が不足している点は課題である。今後は、コンパクトシティの考え方を踏まえ、周辺地域の住民も含めて中心市街地への誘導と空間整備を進める必要がある。
- 人口減少が避けられない中でも、鹿角市として将来に残すべき魅力は何かを見極める必要がある。花輪ばやし、大日堂舞楽、きりたんぽなどは、文化や風土を象徴する普遍的な価値を持ち、人口に左右されずに次世代へ継承すべき資産である。将来的には、こうした地域の「核となる魅力」について、地域全体で大胆に見直しを図る機会を設けることも検討されるべきである。
- 「学校や職場以外の人と交流したい条件」として、「雰囲気が良い」との回答が 61.7% に上っている。この結果は裏を返せば、本市には“雰囲気の悪さ”や“心理的なバリア”を感じさせる場が一定数存在していることを示しており、交流拠点や公共空間における設計・運営のあり方に再考の余地がある。
- 自由記述の中には、「スキーや駅伝といったキャッチフレーズが一部の人にしか響かない」との声や、「市の施策が年配者に偏りすぎており、もっと若者に視点を移すべきだ」といった意見も見られた。これらの指摘は、若者との価値観のずれや政策の世代間バランスに対する疑問を反映しており、今後のまちづくりにおいて若者の視点や共感を得られる発信の重要性を再認識させるものである。
- 約半数が「鹿角市に住み続けたい」と回答していることは、予想を超える結果であり、地元に対する一定の定着意識が若者の中にも根づいていることを示している。この傾向を将来の定住促進に生かすための施策展開が期待される。
- 一方で、アンケートの回収率は 44.1% にとどまっており、過半数の若者が回答していない現実には、若者の多くが市政に対して関心を持ちきれていないことを示唆している。今後は「回答しなかった層」や「わからない」と回答した層の意識や背景を丁寧に分析し、無関心層の実態を可視化する必要がある。
- 若者(特に子ども)が鹿角市について十分に語れない、あるいは語彙力が乏しい背景には、家庭や地域の大人との日常的な対話や体験の不足があると考えられる。地域を語る力の育成には、身近な大人とのコミュニケーションが不可欠である。
- 子どもが五感で地域を体験できる施設や環境が整えば、子ども自身の地域理解が進むだけでなく、保護者の安心感も高まり、結果として家族単位での定住意向の向上につながる。教育・子育て環境の充実、将来的な人口維持に直結する重要な政策領域である。

- 農業に対する興味・関心が他の分野(スポーツ、祭り、子育て、就労環境など)と比べて明らかに低いことが示されている。
- 全般的に、「わからない」と回答する層が一定数存在し、若者の当事者意識の欠如が感じられた。
- 自由意見欄では、多くの若者が市内の若者減少を憂慮する声を上げており、こうした声を単なる感想や不満にとどめず、まちづくりへの参画意識へと育てていく必要があるのではないかと。
- 「商業施設の充実を望む」記述が多く見られたが、商圈に関する理解の不足がうかがえる。仮に大型商業施設を誘致したとしても、鹿角市の人口規模や購買力を踏まえると、経済的に持続可能な運営は難しく、結果として人口減少の抑制に直接的な効果があるとは言いがたい。
- 豊かな自然や祭りを地域の魅力として認識する若者は多いが、それらをどのように活かし、広げていくかについては理解が不足しているのではないかと。
- 地域住民との交流の場として、スポーツを通じた交流を望む声も多い。市内にはスポーツ施設が充実しているが、利用者が少ないので、結果的にスポーツ環境は恵まれていると感じている。
- 祭りやスポーツをきっかけに結婚したカップルも存在する。男女の出会いの場として大規模なコミュニティだけでなく、小規模なコミュニティにも積極的に参加することが効果的とされる。趣味や価値観の合う異性との自然な出会いの創出に寄与している。
- 若者が地域の賑わいの担い手となることについては、中高年世代にとっても非常に喜ばしく、心強く感じられる。若者が主導する活動やにぎわいは、地域全体に活力をもたらし、年配層にとっても大きな価値を持つ存在である。
- 現在の若者は比較的狭い範囲での交友関係にとどまっている傾向があるのではないかと。今後は、世代や立場を超えた幅広い交流が可能となるような、大きなコミュニティの形成や、多様な人々が自然に関われる仕組みづくりが必要と感じる。
- 「鹿角市に不足しているもの」に関する設問では、買物や交通の利便性を挙げた若者が多く、車の運転に支障のない世代であることを踏まえると、意外性のある結果となった。若者が自身の体験としてではなく、他世代や地域全体を客観的に捉えて回答している可能性があるのではないかと。
- 魅力ある就労環境の不足を指摘する声が多く寄せられており、これは人口ビジョンにおいても産業構造の課題として明記されている。特に、支援学級に在籍する障がいのある若者は地元に残る傾向が強く、彼らの就労機会の確保と多様な働き方を受け入れる環境づくりが今後の重要な課題である。
- 交流に関する設問では、例えば八幡平地区では運動会や地域活動を通じた交流がある一方で、それらはあくまで地区単位にとどまっており、花輪ばやしも花輪地区だけ(の交流)であり、鹿角全体での交流は行われていないように感じている。

- 定住意識の設問で、若者の帰りたい、住みたいという意識が感じられるが、住み続けるためには働く場所が必要であり、基幹産業である農業がさらに若者により沿う形として、AI や IT の活用(=スマート農業)により若者が期待できる産業になっていくと思う。
- 若者の中でも花輪ばやしが人気であることが読み取れるが、花輪ばやしは全国区の行事であり、もっと活用することが必要だと思う。そのためには、我々が歴史を学び、そこからストーリー性をもって観光施策につなげていくことでクローズアップされると思う。
- 鹿角ブランドとして確立された北限の桃を加工して、何かしらの方法で産業につなげていくことが戦略として必要に思う。
- 定住意識に関する設問では、正社員の定住意向率が高い一方で、若い時期には一度市外に出る人も多く、就職時から将来にわたって同じ仕事を続ける覚悟を持つ人は決して多くないと思う。10代・20代の段階で、就職支援を工夫することで、市外に出なくても市内で働き続ける人が増えるのではないかな。
- 交流に関する設問では、交流の希望として地域行事と回答した方が多い。花輪ばやしのおかげで世代間交流ができていると感じている。現在は地区外の人にも受け入れていることから、花輪ばやしを活かして世代間交流を広げていければよい。
- 情報ツールに関する設問では、若者の多くが SNS を日常的に利用していることが明らかになっており、これをうまく活用することで鹿角市の魅力発信につなげることができる。若者目線での情報発信は、同世代の関心を引きつけるきっかけとなり、関係人口や定住意欲の喚起にも効果が期待される。

■ 当日欠席された委員からの事前意見

- 真摯に答えてくれる若者に対し、真摯になって応える必要性を感じた。若者の中から参加可能な方々を募り、市政に活かす場を設定してはどうか。
- 定住意識が高い人の 6 割が「住み慣れているから」と回答しているが、学校や働く場所が少ないことから、帰ってきたくても帰ってこれない若者もいるのではないかな。子育てしやすい場所、働く場所があれば、帰ってくるのではないかな。

人口ビジョン(案)に対する意見

- 男性の未婚率が上昇している背景には、外見や身だしなみに自信を持っていない若者が一定数存在していることが考えられる。身なりを整えることで自信や魅力が増し、異性との出会いにもつながる可能性がある。若者が自己肯定感を高められるような支援や啓発が求められる。
- 人口減少が進行する中で、将来的な人材不足は避けられず、特に地域企業への影響が懸念される。受入態勢のさらなる整備によって、多様な人材が安心して働き・暮らせる環境を構築できるのではないかな。
- 若い時期の恋愛体験が地域への愛着形成につながる可能性もあり、高校生同士のカップルを温かく見守り、応援するような社会的な雰囲気づくりも、将来的な定住促進につながるのではないかな。
- 若年女性の働きたい職場・職業を考えるうえで、二つの視点が重要。一つ目は「人材をキャッチすること」である。東京圏に出て手に職をつけた後、Uターンを希望する若者も一定数存在することから、そのような人材を地域としてしっかり受け止め、地元での就業につなげる仕組みが必要である。
- 二つ目は「テレワーク分野への注目」である。テレワークに従事する女性は年々増加しており、子育てや家庭と両立しやすい働き方として定着しつつある。地域としても、女性のライフスタイルに合わせた柔軟な就労機会の拡充を図るべき。
- 福祉関係の仕事においては、深刻な人手不足が課題となっている。実際に、花輪ふくし会では外国人材（ベトナム人）を4名採用したものの、最終的に定着したのは1名にとどまった。
- 施設の運営は、配置可能な職員数に応じて受け入れ可能な利用者数が決まるため、十分な人材が確保できなければサービスの縮小を余儀なくされる。このような現状を踏まえ、福祉分野における安定的な人材確保と、外国人材の定着支援策の強化が求められる。
- 今回示された人口ビジョンについては、あえて厳しめの将来展望を設定したとの説明があったが、重要なのはその実現に向けた着実な行動と継続的な取組である。単なる予測にとどまらず、確実に実行可能な戦略として機能させてほしい。
- 将来展望の実現には、「鹿角市に住みたい」と思える人をいかに増やしていくかが鍵となる。たとえば、武蔵野大学の教員や学生など、継続的に関わりを持つ関係人口を具体的なターゲットとして捉え、まちの魅力や関わる意義を明確に示していく必要がある。あわせて、地域全体のウェルビーイング（住み心地や幸福感）をいかに高めていけるかがポイントになる。

- 定住・移住促進の対象としては、若者層に加え、高齢者層にも注目すべきである。親の介護などを理由に鹿角に戻りたいと考える高齢者も一定数存在するため、そうした層に配慮した支援策や居住環境の整備も重要な視点となる。
- 国から「地方創生 2.0」の 10 年計画骨子案が示され、関係人口の数値化が方針として掲げられているが、鹿角市としてはその上をいくような先進的かつ実効性のある施策に取り組んでほしい。
- 人口減少は避けがたい現実であると受け止めたい。
- 単に移住者数の増加を目指すのではなく、優しさや教養を備えた「質の高い住民」をいかに獲得できるかが、重要な視点ではないか。
- 近年、外国人在住者の増加が見られるなか、地域社会としても多様性への理解を深める必要がある。外国語対応に加え、「やさしい日本語」の活用を通じた多文化共生の促進に向け、市民全体の関心が高まってほしい。
- 若者の自立心に寄り添う形で、一人暮らしを希望する層への家賃補助制度があってもよいのではないか。また、共用スペースを備えたシェアハウスも効果的でないか。
- 都市部への憧れを持つ若者は一定数いる。盛岡などへのアクセスを支援するため、地域住民による乗り合い制度のような仕組みづくりができないか。
- 人口減少は避けられない現実であり、特に若者が進学のために一度地域を離れることは応援したい。しかしながら、将来的に戻りたい、住み続けたいと思えるような地域づくりが重要である。
- 地域に暮らす人々や家族、コミュニティに魅力を感じるからこそ、定住意欲を高める要素となる。個々人が「ここにいたい」と思える体験やつながりが、地域に根ざす動機となる。
- 若者が鹿角市に残るかどうかは、個々にとって魅力を感じる要素の有無に左右される。たとえば祭りのような地域の伝統行事に関わる経験が、愛着の醸成につながるケースもある。
- 過去に鹿角市産業活力塾に参加した経験から、世界で活躍する講師陣の講義を通じて広い視野や多様な価値観を学び、将来設計への理解や具体性が高まったと感じている。このような学びを高校生の段階から取り入れることで、地域の産業や「働くこと」への関心が育まれ、将来的に市内で働く若者の増加につながる可能性がある。実際、自分自身も高校生の頃にこのような内容に触れていれば、進路選択や地域理解がより深まっていたと考えており、次世代育成において有効な施策といえる。
- 総合病院の新設などは現実的ではないものの、産婦人科などの分野において、個人医の誘致を図ることはできないか。
- 高齢者の移動手段として、若者が運転する車に乗り合いできる仕組みを導入すれば、実用的な移動支援となるだけでなく、世代を超えた自然な交流の機会にもつながり、地域のコミュニティ形成を促進する効果も期待できる。
- 人口減少が進行する中で、「一人ひとりの生産性を高めること」が重要である。個人の働きがいと成果を向上させる視点が必要ではないか。
- 自分は息子を 5 人育て上げたが、みんな市外で就職し、帰ってくることはなか

った。進学等で一度市外へ出ていくことはむしろいいことだと思うが、確実に鹿角市に帰ってきてもらうにはどうしたらよいのだろうか。

- 基幹産業である農業の分野では、新たな技術の導入によって収益性を高め、若者にも魅力ある産業として再構築していくことが、産業活性化と地域定着の両面から重要だと考えている。
- あまり上を目指し過ぎても仕方がない。今ある現状でどういう風にするかにもよるが、厳しい現実の中で本当に向き合うことになるのは、私たちよりもその下の世代になるので、高望みすることでもない。妥当といえば妥当と感じる。少し夢を見ている感じをしないでもないが、それぐらいの期待はしたい。
- 魅力ある就労環境が不足している意見が多くあり、人口ビジョンでも産業面の課題が取り上げられている。支援クラスにいる障がいを持つ子の多くは鹿角に残ることから、その就労先の確保も重要な課題と思う。【再掲】
- IT 技術の進展により自分を磨けば起業などのチャンスが広がっている時代となっている。そのためにも、目標と目的を持って市外に出て、スキルを身に付けて必ず帰ってくるという意識醸成が必要である。
- 興味深かったのは、5%の転出抑制と転入者の増加は人口減少対策として同程度の効果があるということで、一度市外へ出たとしても、戻ってこられる仕組みが整えば、人口を維持することは可能であるという希望が持てた。
- 衝撃的だったのは、年少人口が 2065 年より前に 1,000 人を割る状況になることで、今のうちから減少幅を少なくできるように何か対策をしていかなければならないと感じた。
- 市が示す将来推計の中で、「パターン3」が最も現実的であると感じる。人口ビジョンを基に市が今後さまざまな政策を展開していく中で、私たちの意見が少しでも反映され、その成果が人口の推移として表れていく可能性が高いのがこのパターンである。
- 市民の声を踏まえた政策に賛同し、着実に実行していく人が増えることで、人口の急減を抑えつつ、鹿角で暮らし続ける人を増やしていけるという前向きな展望が持てる。

■ 当日欠席された委員の事前意見

- 「2 目指すべき将来の方向」(1)と(2)を関連付けた取組はできないものか。「若者が帰って来たいと思えるまちは、安心して子どもを持つことができるまち」で、両者は相互に関連している。
- 「鹿角市まち・ひと・しごと創生総合戦略」第 1・2 期目標の総括から、それぞれの目標の振り返りがなされている。関連付けてみると、基本目標1(雇用創出・稼ぐ力と地域づくり)の成果を出発点に、(人の流れ)を生み、(若い世代の希

望)も生まれ、(魅力的な地域づくり)の起爆剤となる。関連付けの視点により、新たな施策の可能性も生まれてくると思う。

- 人口減でも幸せに暮らし続けることへの分析・予測・展望も必要ではないか。現状が人口減であることから、「人口減での幸せの維持」にも視点を置くことが、今と未来を幸せでつなぐ政策になるのではないかと考える。
- 若者だけでなく多様で多世代の市民同士が顔を合わせて話し合い、了解し合う場としての未来会議の必要性和意義を強く感じている。これからもよろしくお願いしたい。
- 子育て支援の充実が、若い世代の定住意欲を高めるのではないか。
- すでにある地域資源や空間を有効活用することで、帰郷をうながすことができるのではないか。豊かな自然や生活環境の魅力を再発信すべき。
- 交通手段の充実や利便性の改善で、もっとまちが広がると思う。
- 少しずつでもできることから取り組み、賑わいのある鹿角市にしたいと思う。